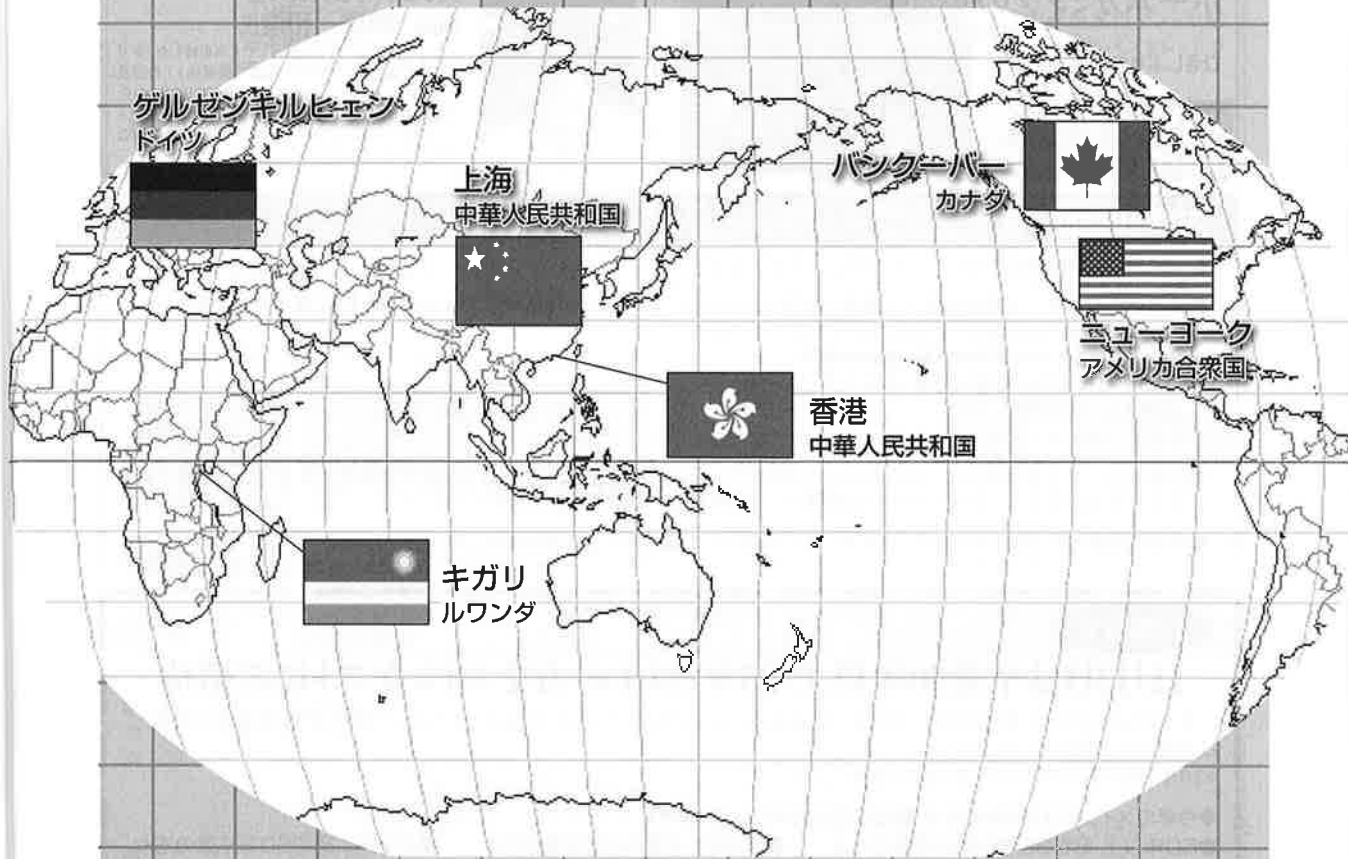


世界の街から、人から

—躍動する都市、活躍する関学生—



関西学院の卒業生の多くが全世界で活躍されています。
 また海外には 20 の支部があり、そこを拠点に交流会や情報交換
 の場を提供しています。
 今回は海外にスポットを当て、躍動する街と活躍する人をご紹
 介いたします。



上海万博リポート
金蓮花（H15総政卒・H18前総政卒）

上海支部会員
日本出展パビリオン勤務



私は卒業後、上海の語学学校に勤務する傍ら、上海万博の期間中に日本が出展するパビリオンに勤めています。それでは、これから皆様をご案内することにいたします。

2010年5月1日から開幕した上海万博。参加国・機関が246を超える史上最多のスケールで180日間と長期にわたる開催期間とあつては、長い行列待ちは避けたいとしても出張や旅行の折には会場まで足を運びたい、と考える人も少なくないのではないのでしょうか。7月に入り毎日の入場者数もほぼ40万人を超えています。暑さが厳しくなっているので暑さ対策は万全にした方がいいでしょう。

地下鉄を利用する場合、万博会場への入場口は、世界軸の南端に位置するメインゲートを含む8つの地上

万博会場地図



ゲート（1号門〜8号門）と地下鉄ゲート（馬当路門）があります。最近ではメインゲートの6号門が一番入場者が多く、2号門と4号門が割と入場者が少ないようです。上海万博会場までは、地下鉄以外に世博專線バスも走っています。

会場内の移動は徒歩のほか、会場内を通る地下鉄やバス・フェリーを利用することになりますので、もし目的のパビリオンが決まっているなら、メインゲート以外の入口から入場するのも、広い会場内で時間をロスすることなく回るためには効率が良いかもしれません。また、園内には多くのボランティアがいるので、何か困るようであればボランティアに助けを求めれば良いでしょう。

パビリオンの混雑状況ですが、以前に報道されていたような混乱は見ら

れませんが、やはり人気パビリオンになると3〜4時間待ちの状況です。人気パビリオンを見ようとするなら相当待つ覚悟は必要かと思えます。現在の人気パビリオンは、中国、日本、サウジアラビア、韓国、スイス、フランス、スペインです。

中国館の場合、予約券を手に入れないと入れません。予約券は会場内に入場する際に配られますが、朝早めに並ぶ必要があります。

日本館の場合、平均3〜4時間待たないと入れません。館内には日本の文化、優れた技術力が紹介され、汚水の濾過装置等が展示されています。また、最先端の技術を使ったメインアトラクションでは、日中友好の象徴であるトキをテーマにした映像を2人のインストラクターが軽快なタッチで展開し、パイオリンを弾くロボットが登場するなどして、観客を魅了しています。日本の文化・技術の紹介にとどまらず、日中友好をテーマにし



中国国家館

たアトラクションで人気を呼んでいきます。

日本産業館は、アジアで唯一の外国民間出展企業館であり、海外開催の国際博覧会では異例の大規模民間出展となります。出展の目玉の一つが「世界一トイレ」です。

また、ベストシティー実践区(E区)の北区インフォメーションセンターで、『城市名片冊』を手に入れると、指定されているパビリオンのスタンプを集めて中国館、ドイツ館、サウジアラビア館に入れます。ただし、この城市名片冊自体も1日1000冊しか配布されないのです、手に入れるのもかなり困難なようです。

お勧めは夜間入場券の購入。これは会場に直接来てもらわないと購入はできませんが昼間より人も少なく、暑さも和らぐし金額も安いです。入場時間は5時〜9時までで制限があります。楽しめるパビリオンはたくさんあるのでしよう。

それでは皆様のお越しを心よりお待ちしております。



虹口(ホンコウ)

昔ながらの上海

坪 忠典(経済学部在学)

上海支部会員
復旦大学留学生(当時)

私は2009年8月〜2010年7月の間、

本校の交換留学生として上海・復旦大学に派遣させていただきました。上海といえは、中国有数の大都市であり、発展目まぐるしい中国経済を表すように次々と変化する街並みは訪れる人を驚かします。しかし、少し裏通りに入ると昔ながらの上海を連想させるようなところも残っており、タイムスリップしたかのような不思議な感覚に襲われます。



そんな不思議な街「上海」で私が気に入っている場所は昔ながらの上海が垣間見られる『虹口(ホンコウ)』と言われる場所です。ここにはサッカースタジアムがあることで有名ですが、私はその裏にある住宅区の昔ながらの風景がお気に入りです。あの有名な魯迅を記念して造られた『魯迅公園』で

は日向ぼっこするおじいさん、二胡の練習をするおばさん、至るところでトランプを楽しむおじさんたちなど、都会の喧騒を離れた中国独特の雰囲気を楽しめます。魯迅公園をぬけて更に住宅区の方へ進んで行くと…道の両端いっぱい広がる市場、赤茶色のレンガ建築の家々、そこらへんに腰掛けてお喋りを楽しむおばちゃんたち、そして道路であくびしているノラ猫…など、大都会上海と言われるこの街にも、こんなにも時間の流れがゆっくりと感じるような光景が存在していることに驚きます。

交換留学生としての約一年という短い滞在でしたが、その中で、発展目まぐるしい上海や昔ながらの上海など、色々な景色が見られてよかったです。

魯迅公園で





Diverse Canadaを「リッパ」な 冬季オリンピック

川端 雅章（S48経済卒）
バンクーバー支部幹事長



6月の日本はサムライブルーのワールドカップでの活躍で大いに盛り上がったようですね。カナダは残念ながら

がら代表を南アフリカに送ることは出来ませんでしたが、全ての試合がCBCテレビ（日本のNHKに相当）で同時中継されました。

移民によって出来上がったカナダはモザイク国家とも呼ばれています。“Respect for Diversity”（多様性の尊重）はカナダの某政党のモットーですが、出身の異なる人達がお互いの文化を尊重しようとするカナダの考え方をよく表しています。るつば（melting pot）のように種類の違う金属を溶かして合金にするのでなく、オリジナルの色そのまま生かすモザイクを目指しているのがカナダなのです。

ワールドカップの全試合が放映されたのは、移民と



浅田真央選手



アイスダンス優勝のカナダペア

その子孫の多くが自分達の出身国を自国と同じような熱心さで応援するからです。日本では注目度の低いチームどうしの対戦は放映されなくても問題にならないと思いますが、カナダは世界各地で飢饉、内戦などが起こるたびに難民を積極的に受け入れてきた歴史があるので、どの代表チームも無視することが出来ないのです。

ところで2月のバンクーバーは冬季五輪一色に染まりました。カナダは1976年の夏のモントリオール、1988年の冬のカルガリーと過去二度五輪をホストしながら、自国開催の大会に限って金メダルはゼロに終わっていました。このあたりがお人よしのカナダらしくて私は好きなのですが、『今度こそカナダの地で金メダルを』が

合言葉になり、優勝候補の選手や競技には大きな期待がかけられました。大会三日目の男子モーグルでカナダの選手が悲願だった金メダルを手にするゴールドラッシュが始まり、



カーリング日本代表

最終的には金14個を含む総メダル数26個と予想を上回るカナダ選手の大活躍にカナダ中が興奮の渦に包まれました。

愛する気持ちを素直に表すことが苦手といわれていたカナダ人が、このオリンピックをきっかけに少し変わったように感じられます。車にはカナダ国旗、子供たちは頬にカエデの国旗をフェイスペインティング、老若男女みんなカナダカラーの赤い服を着て、“Go! Canada Go!”と叫びながら道を歩く姿にスポーツの持つ影響力の大きさを感じたバンクーバーのオリンピックでした。





雄大な自然に魅せられて

曾 秀峰 (H4 商卒)

バンクーバー支部会員



来、旅行会社で四年、エアラインで九年、現在は航空会社のマイレッジプログラムを運営する会社で働いています。

私が一年の中で最も楽しみにしているイベントは毎年五月に開催されるバンクーバーマラソンです。開催日がゴールデンウィーク中ということもあり、日本からも大勢の方が参加されています。在学中は体育会スキー競技部に所属し、夏場は走り込みや筋トレ、冬場は山ごもりと、スポーツに打ち込む日々を送っていました。卒業後は少しずつスポーツから遠ざかり、気付けば四十歳目前となっていました。大会に参加し始めて三年目、学生時と比べてかなり遅いペースですが、なんとか毎回完走しています。海と山、森に囲まれたバンクーバーにはダウンタウンすぐ傍のスタンレーパーク、ブリティッシュコロンビア大学周辺の広大な森のトレイル、海に沈む夕日が美しいイングリッシュベイなど自然を感じるコースがたくさんあります。苦しくなると、甲山の頂上へ続く石段や森林公

園のきつい上り坂を夢中で走っていた頭を思い出すと自然と気合が入り頑張れます。学生時代のような運動三昧の生活はできませんが、時間の使い方を工夫し、いつか「関学同窓バンクーバーマラソン走ろうツアー」なんて企画が出来ればなあ、などと考えながら今後も走り続けたいと思っています。

自然と共存する人生

三國 真里 (H3 独文卒)

バンクーバー支部会員



カナダ人の主人と結婚して、バンクーバーに移住したのが2008年。2年3ヶ月が過ぎました。

現在専業主婦です。海外生活は初めてではなかったものの、北米大陸で暮らすのは初めてのことで、最初はいろいろと戸惑いもありました。それでも徐々にこちらの生活様式や慣習にも慣れ、最近ではいろんなことに楽しみを見出して暮らせるようになってきました。

なかでも一番の楽しみは春から秋にかけて、お天気が良ければ毎週末のように行くハイキングです。日本に住んでいたころは山登りにあまり興味がなかったのに、ダウンタウンから車で30分も走れば堪能できる大自然に魅せられ、ハイキングは今ではすっかり生活の一部になってしまいました。趣味の



激動の「東洋の真珠」〜香港〜

寺田 敏之 (H3文・仏文卒)

キャセイ航空キャビンアテンダント



それはもう14年も前のことですが、今でもまるで昨日のことのように覚えています。以前日本にいたころに勤めていた職場

で、現職の募集広告を新聞でたまたま目にした時のことです。それまで香港が好きでリピーターであった私は香港に住めるチャンスとばかりに、こっそりとコピーを取って早速英文の履歴書作りを始めました。それから数回の試験や面接を経てあれよあれよという間に内定をいただき、当時まだ英国領であった香港に渡ることになったのでした。

私が香港に来て以降、1997年の中国への返還等、香港を取り巻く環境の変化にはすさまじいものがありました。これからの香港はいつたどのような道をたどるか、誰にも予測がつかないことですが、かつて激動の時代をくぐり抜けて「東洋の真珠」と詠われるまでになった魅力としたたかさを失わず、今後も輝きを放つ国際都市であってほしいと願っています。

写真を通して仲間も増え、またKGバンクーバー支部にも入会することができ、ますますたくさんさんの良い出会いにも恵まれました。大変に便利で効率的な日本の生活に比べると、郵便のサービスが悪いことなど不便な点があったり、冬の間は雨が多くて少しうんざりすることもありますが、「住めば都」をモットーに、これからもバンクーバーならではの、自然と共存するゆつたりとした人生を過ごしていきたいと思っています。バンクーバーでの生活をブログに綴っています。
<http://alalowieghts.blogspot.com/>

無線機とポツキー

山中 康民 (S27中学部卒・S30高等部卒)
 バンクーバー支部副支部長



無線の世界に魅せられて、アマチュア無線免許を取得したのが16歳の時。修学旅行で訪れた東京では、メーカーを訪ね歩いて部品を集め、高圧トランスフォーマーを自作した。戦後日本、経済成長の幕開け。ラジオの民間放送が始まった時期。とはいえ、毎日休み時間に組み立てたラジオを放課後に売りに行く学生は、そうそういなかったに違いない。高等部卒業時には、事業を始めるだけの資金が手元にあった。大阪に電機製作所を構えてからも、無線免許の管理者とし

て講習を受け持つたり、盲人用の点字テキストづくりや奔走したり、常に全方向・全力疾走だった。

スキー旅行で立ち寄ったバンクーバーに恋に落ちたのが、1971年。海外旅行がまだ珍しい時代だった。約十年後、カナダに移住を決意。その際、無線講習の生徒であり、親友でもあった江崎勝久社長にカナダグリコ設立を持ちかけた。家族経営の小さな事務所だった。「本当に大丈夫なのか？」野次を飛ばされたが、レストランやスキー場で商品を配り歩いた。1年目は10万ドル、10年目は30万ドル分。商品には自信がある。実物を味わってもらおうとこそ、一番の広告だと確信していた。会社を黒字にするまでの5年間、給料なし。「損して得取れ」。なにわ流の商人魂が



根底にあった。それから24年近く経った今、大手スーパーからコンビニエンストアまで、どこのお店でもグリコのパッケージを見られるようになった。60年を経てたどり着いた「今、ここ」を想う時、無線機に夢中だったあの頃と、何ら変わらぬ想いが自分を突き動かしていることに気付く。「仕事も遊びも、楽しんでやってなんぼでっせ！」

さて、私は客室乗務員として、アジア各国のみならず、アメリカ・ヨーロッパ・オセアニア・アフリカと世界中を飛び回る毎日を送っております。生活の半分くらいは、各地のホテル住まいです。航空会社の客室乗務員というと、いまだに華やかな憧れの職業というイメージが強いのではないのでしょうか。でも実際には、曜日の感覚がなく、常に時差ぼけのため平日の昼過ぎまで寝ていたり、腰痛や手首の腱鞘炎など、どこかしら体にガタがきていたりする人が多いのです。かつて客室乗務員が本当に優雅な生活を送っていたのは、航空旅行が一部の特権階級に限られていた時代の話。今では航空業界自体の競争が激化して、決して恵まれた条件の仕事とはいえなくなっています。

これからの私がどのような人生を歩むのか、私自身にもわかりません。14年前のように突然の境遇の変化が訪れるかもしれないと、たえ何があっても、激動の歴史を生き延びてきた香港のように、たくましく人生の荒波を乗り越えていきたいと思っています。



好きな太鼓を叩いて半世紀

救仁郷 道明 (S46社会卒)
ゲルゼンキルヒエン・レヴィア歌劇場専属



ドイツ人といえ
ば頑固者というイ
メージがあるかも
知れませんが、初
めに4年間暮らし
たベルリンはイン
ターナショナルな
自由さに満ちてい

たし、今住んでいるルール工業地帯
も戦後ドイツ復興の要となった炭鉱
のために外国人労働力を数多く受け
入れたので、言葉こそドイツ語です
が、生まれ育った神戸と感覚的には
全く違和感なく過ごしています。私
が所属しているレヴィア音楽劇場は
ドイツ西部、デュッセルドルフ市か
ら北東40kmのゲルゼンキルヒエン市
にあります。

人口26万人の中都市ですが、名所
といえはこの劇場と31ヘクタールの
広さを誇る動物園と1904年創立
のサッカークラブ、FCシヤルケ04で
す。

このサッカー・アリーナは20
06年ワールドカップの会場にも
なったドイツ唯一の閉鎖式ドームで、
サッカー以外にも毎年12月末のス

キー・バイアスロン・ワールドチー
ム杯、ボクシングやアイスホッケー
の世界選手権など、各種スポーツは
もちろん、コンサートなどにも使用
され、私達のオーケストラは200
1年「アイダ」、2003年「カル
メン」を観客5万人というスケール
で上演しました。

大した知識も持たずに来たドイツ
ですが、38年間暮らして、3人の子
供達も大学卒業後長男はこの街、次
男はハンブルク、長女はデュッセル
ドルフでとそれぞれ独立して生活し、
いつの間にかこの国に根を下ろした
感があります。

65歳の定年まであと3年足らずに
なりましたが、好きな太鼓を叩いて
生活して来れたことと、ヨーロッパ
サッカーで飛躍しつつあるシヤルケ
のサポーターになれた環境に感謝し
ています。

これからも
日本とドイツ
がお互いより
深く理解しあ
える関係にな
るように、微
力ながら役に
立てればと思
っています。



ゲルゼンキルヒエン・レヴィア歌劇場

アフリカの奇跡

瀧本 康平 (H15総政卒)
独立行政法人国際協力機構 (JICA) ルワンダ支所

ルワンダと聞
いて、みなさん
の頭に思い浮か
ぶのは、199
4年の大量虐殺



でしょうか。ルワンダは、当時の人
口の1割にあたる約80万人の命を亡
くした悲劇から16年、アフリカで最
も飛躍的な経済成長を遂げ、「アフリ
カの奇跡」とも呼ばれています。また、
国会議員の女性の割合は世界一、ゴ
ミがほとんど落ちていない美しいキ
ガリ(首都)の街並み、近隣国に比
べても非常に良い治安、汚職が極め
て少ないこと等、自慢できるポイン
トもたくさんあります。

一方、生活の質や発展度合いの指
標である人間開発指数によれば、世
界182カ国中162位(2009
年)であり、
経済的・社
会的にも発
展の余地が
残されてい
ます。



私は日本
政府による
開発途上国
への援助の



世界秩序の青写真を描く

田頭 麻樹子 (S 55文・英文卒)

ニューヨーク国連本部職員



ニューヨークは、つくづく世界の中心だと思ふ。さわやかな青い空に向かって

伸びる摩天楼、街の通りを勢い良く歩くニューヨーク、あちらこちらを見ながらゆつくりと歩く旅行者、手を上げると、さつと来て止まるイエローキャブ。朝早くから晩遅くまで、ダイナミックで、躍動感があつて、一度ここに住むと、ここより刺激のない街にはもう住めない、と思つてしまふ。

中でも醍醐味は、この街の多様性に尽きると思ふ。自分の過去や、国籍、人種、性別、宗教、貧富の差に関わらず、努力すれば誰もが成功するチャンスをつかむことができる。

ジュネーブからこの刺激の多い街にやつて来て早18年。その間、国連の経済社会局で働きながら、結婚、高齢出産、マンハッタンからクイーンズの一軒家へ引越しし、現在2人の息子(まだ13歳と10歳)と格闘中である。週末はサッカーママになって、試合の送り迎えに奔走している。その影響で、ワールドカップも詳細に

フォローしてきた。

国連でも南アフリカ共和国が、会議中でも試合を見られるようにFIFAコーナーを設立したほどの熱の入れよう。国連はスポーツフォーピースというキャンペーンをやつていて(<http://www.un.org/themes/sport/>)その一環として国連事務総長もワールドカップ開催の一日前に南アまで駆けつけた。紛争や都市犯罪の多い地域では、若者たちが、武装勢力や犯罪組織に勧誘されたり、過激思想に影響を受けたりしている。スポーツを通じそうした若者たちのエネルギーを、良い方向に向けようというものだ。

ハイチの災害後の復興、テロや国内紛争の水面下での予防、そして、平和維持活動等等、国連の抱える課題は多い。グローバル経済危機以降、先進国の財布の紐は堅くなり、新興国は、まだその成長に見合った責任を果たすまでには至つておらず、21世紀の世界秩序の青写真はまた誰にも描けていないように見える。

より良い世界を作るために、明確なビジョンを持つた若いリーダーを育てることが、今一番必要とされているのかもしれない。かも知れない。



実施を担う JICA のルワンダ支所のスタッフとして、水・衛生の事業を担当しています。JICA が支援する地区では、人口の半分以上が遠い井戸から水を運ぶか、近くの安全でない水を飲むことを強いられています。そのため、女性や子どもが水運びに多くの時間を費やさざるを得なかったり、下痢や寄生虫疾患の蔓延といった問題が起きています。

これらの問題に対処するために、JICA は給水施設の建設やその維持管理のための技術支援、衛生に関わる住民への啓発活動等の支援を展開しています。お金を払つて水を購入したり、施設の維持管理が出来るようになることは、厳しい自然条件で生活する収入の少ない住民にとっては容易なことではなく、プロジェクトの進捗が「三歩進んで二歩下がる」となつてしまふこともやむを得ないと感じています。

しかし、勇気付けられるのは、ルワンダでは、政府関係者も一般の人々も、非常に謙虚で真面目なことです。

ゆつくりであっても、彼ら自身の力で、一歩ずつ前に進んでいけるよう、影ながら応援をしていきたいと思つています。

